

駿河ほねほね団報告
スジイルカ 解剖記
本多 佐おり



2024年2月14日、駿河ほねほね団のグループLINEにスジイルカのスランディング情報が飛び込んできました。富士スランディングネットワークに在籍している団員から、サンプリングだけでも行ける人はいないか、という連絡でした。場所は大浜海岸です。直後に、ふじのくに地球環境史ミュージアムの西岡先生より回収の申し出があり、イルカはその日の午前中には回収、無事にミュージアムの冷凍庫に保管されました。後日、そのイルカの解体作業を行うにあたり、国立科学博物館の田島木綿子先生らがミュージアムに来館され、解剖方法やサンプリングについてのご指導をしてくださるという、大変貴重な機会に我々駿河ほねほね団も参加させていただくこととなりました。

解体作業は5月25日に決まり、当日はほどよい緊張感とワクワク感に包まれながら団員が集まりました。メンバーの多くにとっては、初めてとなる本格的なイルカの解剖です。作業は屋外で行われました。地面にブルーシートを敷きその上にイルカを置いて、田島先生から軽く説明を受けたら作業開始です。

解剖と言っても、大部分の時間は計測に費やされました。普段のほねほね団の活動でも解剖前に計測をしますが、それとは比べ物にならないほど多くの項目を迅速に計っていきます。そして、その一つ一つが非常にシビアで、かなりの正確性が要求される大変な作業でした。まず、イルカの吻と尾びれの間を地面と平行になるように高さ数十cmの位置でメジャーを渡し、そ

の両端をそれぞれ1人ずつが持って固定します。そのメジャーを基準にして計りたい部位を今度は地面と垂直に定規を当てて計っていきます。メジャーを持つ担当になった2人は計測が終わるまで中腰のまま動けませんので、体力も必要となります。

当初は見学のみになるのではないかと予想されていましたが、始まってみると田島先生の指示に従い団員もみなテキパキと動き、またとない貴重な機会ですから緊張しながらも楽しく計測に参加しました。私はイルカのへソの位置を計る事ができたので、イルカが哺乳類である事を改めて実感できる良い経験となりました。

外側の計測が終わると、イルカはいよいよ解体されていきます。内臓も、それぞれの重さを計ったり、長くてそのままでは計れない腸を綺麗に折り畳み分割して長さを計ったりしました。その間にも寄生虫を見つけては容器に回収したり、一頭のイルカが余す事なく隅々まで調べ尽くされていきます。スランディングした個体を決して無駄にしないという強い熱意を感じました。

つい、効率の良い除肉や美しい骨格標本を作る事に執着しがちな骨好きのほねほね団ですが、その生き物を取り囲む環境までも含め、生き物の現状を知る（もしくは知るための足掛かりとなる）事こそが解剖を行う本来の目的であるのだと痛感し、計測の重要性を再認識した一日でした。